

	<b>ニホンイヌワシ</b> タカ科
体長	75～90cm (翼開長)175～210cm
体重	3～5kg
分布	大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、日本(北海道、本州、四国、九州の島嶼部を除く山岳地域)。
食べ物	食性は動物食で、哺乳類、鳥類、爬虫類、動物の死骸などを食べます。上空から獲物を発見すると、翼をすぼめ急降下して捕らえます。通常は単独で獲物を捕らえますが、1羽が獲物の注意を引きつけ、もう1羽が獲物の後方から襲い掛かる事もあります。
主な特徴	開けた森林や草原などに生息冬季に南下することもある。日本では周年生息する留鳥。和名のイヌは「劣っている、下級の」の意で、クマタカなどに比べて本種の尾羽が矢羽としての価値が低かった事に由来します。漢字表記の狗は本種が天狗を連想させることに由来しています。全身の羽衣は黒褐色や暗褐色、後頭の羽衣は光沢のある黄色で、英名(golden=金色の)の由来になっています。断崖や大木の樹上に木の枝や枯草などを組み合わせた巣を作ります。営巣場所が限られるため毎年同じ巣を使うことが多いです。日本では2～3月に1～2個の卵を産みます。主にメスが抱卵を行い、抱卵日数は43～47日、育雛も主にメスが行い、育雛期間は70～94日で通常は1羽のみ育ちます。ヒナは孵化してから65～80日で飛翔できるようになり、3か月で独立します。生後3～4年で性成熟し、生後5年で成鳥羽に生え。開発による生息地の破壊、害鳥としての駆除、人間による繁殖の妨害などにより生息数は減少し、農業汚染も懸念されています。日本では1965年に種として国の天然記念物、1976年に岩泉町と北上町が「イヌワシ繁殖地」として国の天然記念物に指定されています。1993年に種の保存法施行に伴い「国内希少野生動物種」に指定されています。ホンイヌワシは国内での生息数がおよそ400羽ほどです。絶滅危惧種です。石川県の県の鳥に指定されています。
	<b>ホルスタイン</b> 牛 ウシ科
体高	140～160cm
体重	(オス)800～1100kg (メス)500～600kg
分布	オランダ北部、ドイツ北部
食べ物	草
主な特徴	ミルク(牛乳)を採る為の代表的な牛です。1年間に約6300kgものミルクが採れます。日本の酪農家3万2千戸で飼われている172万頭の乳牛のうち99.5%がホルスタインです。北アメリカ大陸で乳専用種として改良された品種です。体格は大型でくさび型の体型、体色は黒ぶちに白で角があります。ホルスタインは人間と違い、ミルクを出しながらも受胎することができ、なおかつ、人間よりはるかに長期間にわたってミルクが出ます。人間はこれを利用して、14ヶ月サイクルで妊娠を繰り返させ、出産直前の2ヶ月を除いてずっとミルクを絞り続け、効率の良い酪農経営をしています。
	<b>馬(ベルシュロン)</b> ウマ目
科	ウマ科
体高	肩高:152～170cm
体重	700～1000kg
分布	世界中に広く分布
食べ物	食性は植物食で、主に草。

主な特徴	馬の一品種です。フランス、パリ西方のベルシュ地方の原産で、体はがっしりとし、鞍馬(ばんば・荷を引くための品種)として世界中に普及しています。自動車が普及するまでは、馬車を引く大型の馬として活躍していました。毛色は青毛、芦毛等が多く、体型はサラブレッドに比べ足が短く、胴が太いです。体高(肩までの高さ)は 160-170cm で大きなものでは 2m を超えます。体重は 1 トンにもなりサラブレッドの倍ほどにもなります。性格は大人しく従順ですが、力持ちです。
徴	その強い力を生かし、馬車馬、挽馬、ショーなどに使われます。かつては軍馬として、全身甲冑を着こんだ重装騎兵の乗馬や、大砲の牽引などに用いられました。日本では主に北海道で導入されて、ばんえい競馬にも使われ、初の 1 億円馬キンタローもベルシュロンの影響を強く受けています。記録に残る最大の馬はドクトール・ル・ジェアという牡馬で、体高 211cm、体重 1,370kg にもなりました。
目	ヒトコブラクダ 偶蹄目
科	ラクダ科
体長	250cm～330cm
体高	180～210cm(地面から肩まで) 190～230cm(地面からコブまで)
体重	600～1000kg
分布	北アフリカ、アジア南西部
食べ物	木の枝、葉、草
主な特徴	家畜として飼われています。野生のものはすでに絶滅しています。1400万頭いるラクダ類のうち90%を占めていると言われています。コブは脂肪をたくわえる為、長いまつ毛は開閉できる鼻の穴(砂嵐から目を守る為)、厚くて幅広い足裏は砂地を歩く為、など砂漠地帯に適した体の作りになっています。胸や足の付け根にはタコがあり、固い地面に座って過ごすのに適しています。コブの重さは小さいもので約3kg、大きくなると約15kgにもなります。フタコブラクダとの違いは、フタコブラクダは小石などの転がる荒地に住んでいるのに対し、ヒトコブラクダは砂地に住んでいます。
目	トナカイ 偶蹄目
科	シカ科
体長	120cm～220cm
体重	60～320kg
分布	ユーラシア北極部、カナダ、アラスカ、グリーンランド
食	草、木の皮
主な特徴	トナカイは、森林やツンドラ地帯に生息しています。体毛は、夏毛が褐色、冬毛は灰色になります。クリスマスソングに歌われるように、トナカイの鼻は赤いと思われがちですが、実際は鼻づらの皮膚は露出しておらず、体と同色の体毛が生えています。子供の頃は袋角という表被のある角ですが、成長すると表面の皮が剥がれ、枯角と呼ばれる角になります。枯角は毎年 11 月から 12 月くらいに落ち(落角)、生え変わります。鹿の仲間では雌雄両方に角があるのはトナカイだけの特徴です。また、角は漢方薬としても用いられます。
	有袋目 アカカンガルー
科	カンガルー科
体長	85～160cm

尾長	65～120cm
体重	20～65kg
分布	オーストラリア(東海岸付近や北端、南西端を除く)固有種
食	食性は植物食で、イネ科の草等の植物を食べます。
主な特徴	やや乾燥した岩石の多い草原に小群ですんでいます。メスはおよそ 8 ヶ月間、育児嚢と呼ばれる袋の中で 1 頭の子供を育てます。生まれたばかりの子供はわずか体長 2cm、体重 0.9g です。オスは体が赤くメスは灰色ですが、灰色をしたオスもいます。有袋類の中で最も大きいものの一つです。時速約 45km で走りまわります。
	<b>ウサギ目 飼いうさぎ</b>
科	ウサギ科
体長	一般的に 40～50cm (耳長)6～8cm
尾長	一般的に 4～7cm
体重	一般的に 2～4.5kg 最小品種で 0.9kg、最大品種で 7.0kg
分布	家畜種なので、世界中
食	食性は植物食で、多くの植物の葉、芽、枝、樹皮、野菜を食べます。
主な特徴	家畜種です。カイウサギとアナウサギは同一種です。つまりアンゴラウサギやテーブルウサギなど、カイウサギの全品種はアナウサギから作られました。バリエーションを含め、その種類は 150 におよびます。アナウサギは、古くから食用として捕らえられ、飼育されていました。11～12 世紀には修道院での飼育が盛んとなり、本当の意味での家畜化が始まりました。現在ではウサギというと、おもに愛玩用か毛皮用ですが、家畜化の最初の目的は食用です。ウサギは、ハムスター、モルモット、リスなどと同じ齧歯目とは違います。前歯の重なりが多少違ってきます。日本でも明治初期に輸入され始め、突然変異で生まれた色素を失った白いウサギを交配させて日本白色種(全身白色で目が赤い)として品種を固定させました
	<b>モルモット ネズミ目(齧歯目)</b>
科	テンジクネズミ科
体長	20～40cm
尾長	0cm
体重	0.5～1.5kg
原産地	南米(ペルー南部、ボリビア南部、アルゼンチン北部、チリ北部)
食べ物	食性は草食で、草、野菜、果物を食べます。
主な特徴	元来、アンデス山脈に自然分布していたと考えられるげっ歯類です。古代インディオによって野生種を家畜化したものと言われています。基本的に夜行性で、群れを基本とした階級社会的な動物です。元々アンデスのような乾いた高地の穴の中で生息しており、高温多湿に弱いです。モルモットが健康を維持できる気温は 17℃から 24℃とされています。限界温度は 10℃から 30℃です。頭が大きくずんぐりとした、ブタのような体付きをしているため、英語では西アフリカの国ギニアのブタという意味で「ギニービッグ」と呼ばれています。学名の種小名 porcellus も「小さなブタ」を意味します。この名前の由来については、テンジクネズミの肉の味が豚肉に似ているためという説、鳴き声がブタに似ているという説、ブタのように長い時間を摂食に費やし、ブタのように狭い小屋で飼えるからという

	<p>説もあります。実験動物やペットとして広く飼われています。日本には天保 14 年(1843 年)にペットとして紹介されました。アレルギー反応の研究や抗生物質の検定などに用いる実験動物として、系統の確立が進められてきましたが、一般に思われているほど、実験動物としての重要度は高くありません。人には良く慣れますが、生まれつき高い所が苦手で、幼い頃から慣れていないと抱かれるのを怖がります。寂しがりで、一頭飼いの時には気をつけないといけません。鳴き声を交わす事で不安を軽減し、コミュニケーションを取ろうとする性質があるようです。性格は非常に温和ですが臆病者で、ストレスの溜まりやすい動物です。飼いやすい動物ではあるのですが、ストレスで寿命を縮めないように接してあげましょう。寿命はおおよそ 5~8 年です。</p>
	<b>アジアゾウ(インドゾウ) 長鼻目</b>
科	ゾウ科アジアゾウ
体長	550~640cm
体高	250~300cm
体重	約 4700kg
分布	東南アジア、中国南西部
食	食性は植物食で、草、木の葉、木の皮、根、実、竹などのほとんどの植物
主な特徴	<p>中国南部から東南アジア、インドの人里はなれた丘陵地や山間部の森林に生息しています。アフリカゾウより体が小さく、また背中が丸く耳は小さく、頭に 2 つのコブがあるのが特徴です。1 頭のメスを中心とした群れを作ります。植物をすり潰す臼歯(きゆうし)が発達し、奥の歯が前の歯を押し出すようにして、一生の間に 5 回も生え変わります。インドでは家畜としても飼われてきました。アジアゾウは、インドからマレー半島に分布するインドゾウ、マレーシアからインドネシアにかけて生息するボルネオゾウ、スリランカのセイロンゾウなどに分かれて分布しています。ワシントン条約附属書 I に記載され、取引は厳しく制限されています。絶滅危惧(EN)です。</p>
	<b>網目キリン 偶蹄目(ウシ目)</b>
科	キリン科
体高	250~370cm
	頭までの高さ 500~580cm
体重	550~1900kg
分布	アフリカ(ケニア、タンザニア、エチオピア等)
食	食性は植物食で、草の葉や実、木の葉、昆虫等を食べます。
主な特徴	<p>オス 1 頭と 2~3 頭のメス、子供と群れを作り、アカシアやカンランなどの生えた開けた疎林(そりん)や木がまばらに生えた草原にすんでいます。全生物の中で、最も背の高い動物です。キリンの特徴である長い首は、他の動物と同じ 7 つの骨で構成されています。舌は約 45cm と長く、黒色をしていて、この長い舌で巻き取るようにして木の葉や小枝などを食べます。休んだり眠るときも、ほとんど首を立てたまの姿勢で過ごします。また高い頭に血液を送るために強い心臓を持っています。メスは 5 歳ぐらいから出産し、妊娠期間は約 15 ヶ月です。</p>
	<b>げっ歯目 アメリカビーバー</b>
科	ビーバー科
体長	80~120cm
尾長	25~45cm

体高	(肩高)30～60cm
体重	10～30kg
分布	北アメリカ
食	食性は植物食で、木の葉、枝、皮等を食べます。
主な特徴	森林内の川や湖に生息し、主に水中で生活しています。後ろ足に水かきがあり、鼻の穴は水中で閉じる事ができます。齧歯類で最大の尾は、泳ぐ時にはヒレとして、また危険を仲間に知らせる時には、水面を叩いて避難の合図を出すのに役立ちます。齧って倒した木や、石、土を使ってダムを作り、水中から出入りできる巣を水辺に作ります。周りの環境を水で潤った土地にするため、乾燥を防ぎ、森林再生に役立っていると言われてます寿命は 10～15 年です。
目	奇蹄目(ウマ目)インドサイ
科	サイ科
体長	310～380cm
体高	148～186cm
体重	1600～2000kg
分布	アジア南部(インド北東部、ネパール)
食	食性は植物食で、草や木の枝、果実、水生植物、タケノコなどを食べます。
主な特徴	草原や湿地、森林などに生息しています。ヨロイのような皮膚に覆われ、目立つひだがあります。草の茂る湿地帯に群れを作らず単独または親子で生活しています。水浴びを好み、長い時間水につかったりします。サイの中では最大で、オスは体長 4.5m、体高 1.8m、体重 2t を超えます。角は 1 本でオス、メス共にあり、爪と同じ性質で一伸び続けます。現在野生では約 2100 頭程しかおらず、動物園での繁殖が期待されています。妊娠期間は 462～491 日で、1 回に 1 頭の幼獣を産みます。子が生まれると次の子を産むまで母子で行動しますが、子が 2 歳を迎えた頃から発情期に入ります。日本では多摩動物公園が初めて本種を飼育・展示し、1973 年に繁殖に成功しました。ワシントン条約附属書 1 に記載され、取引厳しく制限されています。絶滅危惧種(危急種)です。
	偶蹄目(ウシ目) かば
科	カバ科
体長	280～420cm
体高	130～165cm
体重	1350～4500kg
分布	アフリカ
食	食性は植物食で、主に草を食べます。夜間に陸上に上がり、草原などで採食しています。
主な特徴	陸上ではゾウやサイに次いで大きい動物です。アフリカ中央部から南西部にかけての河川や湖沼に広範囲で生息しています。水の中にいるのは、皮膚が乾きやすい為です。昼は水の中で休み、夜に陸に上がり、ふんをまき散らしながら草地へ行き、草を食べます。フンは帰り道の印になります。母親は子供の顔のすぐ脇を歩かせるのですが、これは体が大きいので見えなくなってしまう為です。赤ちゃんの多くは水中で乳を飲みます。陸上での走る速度は、時速 4、50km にもなると言われています。食用などに利用するため狩られていましたが、現在ではアフリカゾウの減少から、象牙の代わりとして本種の巨大な牙が狙われるようになってしまいま

<p>た。地域によっては既に絶滅した場所もあります。推定の生息数は、120000～140000 頭とされています。ワシントン条約附属書 II に記載され、国際的な取引は厳しく制限されています。絶滅危惧 (VU・危急種) です。</p>
---

目	ライオン 食肉目 (ネコ目)
科	ネコ科
体長	140～250cm
尾長	70～105cm
体重	120～250kg
分布	アフリカ (赤道ぞいの熱帯雨林を除くサハラより南)
食	肉食
主	ネコ科の動物ではトラに次ぐ大きさで、草原から砂漠まで様々な環境に生息しています。ネコ科の動物としては唯一群れを形成します。オス 1～3 頭と 15 頭くらい
な	のメスと、その子供からなる群れを作ります。この群れの事をプライドと呼びます。メスが中心となり、協力して狩りをします。メスの子供はそのまま群れに残ります
特	が、オスは成長すると群れを去らなければなりません。メスには鬘 (たてがみ) はありません。子供には斑点がありますが、約 6 ヶ月程で消失します。妊娠期間は
徴	110 日前後です。ワシントン条約附属書 II に記載され、国際的な取引は厳しく制限されています。絶滅危惧 (VU・危急種) です。

目	アムールトラ 食肉目
科	ネコ科
体長	オス: 260～330cm    メス: 230～280cm
尾長	60～110cm
体重	オス: 160～300kg    メス: 100～180kg
分布	インド、ネパール～東南アジア (アムール、ウスリー、中国東北部)
食	食性は動物食で、イノシシ、シカ、サル、魚、昆虫等、様々なものを獲物にします。
主	トラはネコ科最大で、アムールトラはそこの中でも一番大きな種です。森林、やぶ、湿地の周辺などに生息します。
な	夜行性で 1 頭で行動します。トラの狩りの方法は、森林の中で獲物を見つけると茂みに身を伏せ、背後から忍び寄り近づいたら一気に襲いかかるもので、体のし
特	ま模様が見事なカモフラージュになります。美しい毛皮目的やスポーツとしての狩猟、生息地の森林伐採による獲物の減少などにより、生息数は減少しています。
徴	密漁も絶えません。自然界での生息数は 300～400 頭程といわれています。ワシントン条約附属書 I に記載され、取引は厳しく制限されています。絶滅危惧 (EN) です。

目	ぼんどういるか クジラ目 (鯨目)
科	マイルカ科
体長	2～4m (生まれたばかりの赤ちゃんは約 1m)

体重	150～650kg（生まれたばかりの赤ちゃんは 15～30kg）
分布	世界中の熱帯～温帯の陸近くの海に生息。日本の周辺海域でもよく見られます。
食	食性は動物食で、魚類、イカ、タコ、オキアミなどを主に食べ、カニなどの甲殻類も食べます。
主な特徴	水族館などではもっともポピュラーなイルカで、人によく馴れます。イルカと呼ばれる仲間では大型の種類に属します。体色は濃いグレーで腹部がやや白いです。生息する地域により差があります。群れで暮らし、協力し合って狩りや子育てを行います。そのため仲間どうしのコミュニケーションが活発に行われ、「ピーピー」、「ニャア」といったような音を出して、仲間同士で連絡をとりあいます。これをエコーロケーションといいます。エコーロケーションとは 1000～20 万 Hz の断続音（人の耳にはカチッ、カチッと聞こえるクリック音）をメロン（頭部にある音を集めて発射する器官）から発射します。そして反射してきた音は、下あごの骨を通して耳に達します。このように超音波で物を見ることをエコーロケーションといい、エサを探したり仲間とコミュニケーションをとったりするのに使われます。そのほか、接触によるコミュニケーションも行われるようです。本来の和名は「ハンドウイルカ（半道海豚）」というのが正式なのですが、1957 年、鯨類学者の西脇昌治博士が「バンドウイルカ（坂東海豚）」と提唱したのが発端となり、現在では「バンドウイルカ」という呼び名が一般化しています。寿命は約 40 年ほどと言われています。

	コツメカワウソ 食肉目(ネコ目)
科	イタチ科
体長	45～61cm
尾長	25～35cm
体重	1～5kg
分布	南アジア（インド、スリランカ）、 東南アジア（インドネシア、カリマンタン、パラワン、中国南部）
食	食性は動物食で、カニ、エビ、カエル、魚等を食べます。
主な特徴	河川や湖沼の周辺に生息しています。小型のカワウソで、名前の通り指の爪は大変小さいのですが、とても器用です。川のドロをかきまわしてエサを捕ります。他の多くのカワウソが口で獲物をくわえて捕まえるのに対し、コツメカワウソは両手を前に伸ばして泳ぎ、その手で獲物を掴みます。他のカワウソと違って、家族を中心とした数頭のグループで行動します。人にもよく慣れ、マレーシアでは漁にも使っています。ワシントン条約附属書 II に記載され、国際的な取引は厳しく制限されています。絶滅危惧（VU・危急種）です。

	柴犬 食肉目
科	イヌ科
体長	オス:38～42cm メス:35～38cm
体高	37～40cm
体重	オス:9～11kg メス:7～9kg
分布	日本
食	雑食

主な特徴	日本犬の代表格とも言える犬種です。日本犬保存会によれば、現在日本で飼育されている日本犬種(6犬種)のうち、柴犬は約80%を占めます。日本国外でも人気が高い犬種です。ピンと立った耳とクルッと巻いた尾、とがった鼻が特徴です。日本の天然記念物です
------	--

	エゾヒグマ 食肉目
科	クマ科
体長	200~230cm
尾長	約 7cm
体重	150~250kg (最大 520kg)
分布	北海道
食	食性は雑食で、小動物、魚、草、木の実等を食べます。
主な特徴	北海道にすむヒグマの仲間で、日本最大の哺乳類です。小動物や魚などを食べますが、まれに牧場の馬や牛を襲うこともあります。2000~3000 頭いると言われています。冬には穴ごもりをし、1~3 頭の子供を産みます。冬ごもり時に巣穴にこもる時期は晩秋から初冬にかけての期間で、積雪とは関係がありません。冬ごもり中の体温は活動時期より 4~5 度下がります

	ジャイアントパンダ 食肉目(ネコ目)
科	クマ科 (中国ではジャイアントパンダ科とするのが一般的)
体長	120~150cm
尾長	10~13cm
体重	75~160kg
分布	中国南西部の四川省、陝西省、甘肅省の標高 1300~3500m に分布。
食	食性は雑食で、竹、竹の子、小動物等を食べます。
主な特徴	高い山の竹林で群れや家族を形成せず、基本的に単独で生活しています。他のクマ科の動物と異なり、冬眠はしません。1869 年に発見されました。野生下の生態はよく分かっていません。もともと希少な哺乳類のひとつで、野生のジャイアントパンダは中国の中西部におよそ 1000 頭が生息するだけと推定されています。ジャイアントパンダの赤ちゃんは約4年で大人になります。ワシントン条約(絶滅のおそれのある野生動物の種の国際取引に関する条約)では付属書 I にランクされ、売買が禁止されています。中国国家一級重点保護野生動物に指定されています。絶滅危惧(EN)(近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの)です。寿命は野生下で 15~20 年程度だと言われています。

	にほんりす ネズミ目(齧歯目)
科	リス科
体長	15~22cm



尾長	13～17cm
体重	250～310g
分布	日本(本州、四国、九州、淡路島)固有種(広島県では絶滅)
食	食性はほぼ植物食で、夏季から冬季にかけて主にオニグルミやマツ科の種子(アカマツ、カラマツ、ゴヨウマツなど)を食べます。また植物の芽、花、果実、種子、キノコ、昆虫なども食べます。春季は種子以外の植物質を食べる比率が大きくなります。
主な特徴	亜高山帯までの森林に生息し、低山地の松林を好みます。樹上生活を営み、樹上に木の枝や樹皮などを組み合わせた球形の巣を作ります。耳が大きく、冬毛では先に房毛が生じます。体色は、冬は褐色、夏は赤褐色で、尾の先は白色です。昼行性で、冬眠はせず、木の実などを分散して土の中に貯蔵します。危険を察知すると、警戒音を立て、毛をふるわせませす。サハリン経由で日本に侵入したキタリスが分化した種だと考えられています。以前は食用とされたり、毛皮が利用されることもありました。狩猟獣でしたが、第二次世界大戦以降は捕獲数が減少し、1994年に狩猟鳥獣から除外されています。開発やマツ材線虫病による生息地の破壊などにより生息数は減少が懸念されています。広島県では1966年以降の発見例がなく絶滅したと考えられています。九州では1970年代以降捕獲例がないことから絶滅あるいはほぼ絶滅したと考えられています。ペットとして輸入されているキタリスが逃亡し、ニホンリスと交配して雑種が生じることも危惧されています。

	アカゲサル サル目
科	オナガザル科
体長	47～64cm
尾長	19～31cm
体重	4.5～10.9kg
分布	インド、東南アジアの森林
食	雑食性(果実、若葉、穀物、昆虫、小動物等)
主な特徴	山地に群れで生活しています。地上と木の上を半々くらいに利用しています。アジア大陸に広く住んでる猿で、中国では日本のニホンザルのように普通に見られる猿です。体毛は褐色、上半身はより灰色がかり、下半身は黄色ないし赤色がかかっています。ニホンザルに似ていますが、比較的小形で、尾も長めです。実験動物としても大量に捕獲されてきました。Rh式血液型はこのサルを使った実験から発見されたもので、Rhとは英名の「Rhesus Macaque」の頭文字です。近年、日本においてペットとして飼われていたアカゲザルが野生化し、ニホンザルの混血が問題となっています。日本では外来種となっています。ワシントン条約附属書Ⅱに記載され、国際的な取引は厳しく制限されています。

	ニシローランドゴリラ 霊長目(サル目)
科	ヒト科(ショウジョウ科)
体長	(オス)約120cm (メス)約105cm
尾長	0cm
体重	(オス)150～160kg (メス)90～100kg
分布	アフリカ中央部

食	食性は雑食で、草、果実、木の葉、木の芽、昆虫等
主な特徴	サルの仲間では一番大きく、オス1頭、メス数頭からなる集団でくらしています。ゴリラにはマウンテンゴリラ、ヒガシローランドゴリラ、ニシローランドゴリラの3種類の亜種があります。そのどれもが野生では絶滅の危機に瀕しています。日本の動物園にいる約50頭のゴリラはすべてニシローランドゴリラです。体毛が短く、赤みがかったのがニシローランドゴリラの特徴で、低地雨林にすんでいます。ゴリラは興奮したり緊張したりしたとき、立ち上がって大声を発し、両腕で胸をたたいて音を出す行動をとることがありますが、これをドラミングといいます。東京都の上野動物園を中心とした「ズーストック計画」に基づき、ゴリラ繁殖のプロジェクトが進められています。寿命は野生下で約35年です。絶滅危惧(CR)です。

	アカカワイノシシ 偶蹄目
科	イノシシ科
体長	100～150cm
体高	58～96cm
体重	50～120kg
分布	セネガルからコンゴ民主共和国までの西アフリカから中央アフリカ
食	食性は雑食で、主に根茎、落ちた果実などですが、トカゲやヘビ、鳥の卵なども食べます。
主な特徴	森林やその辺縁部、深いやぶなどに棲息します。4～20頭ぐらいの群れで生活し、主に薄暮過ぎから活発に活動します。発情期は12～1月、出産期は4～5月で3～5頭の仔を産みます。日本に棲息するイノシシと同じく、仔は写真のとおり、まさしくウリ坊です。土の中の昆虫や植物を食べる場合、鼻先を使って地面を掘り返して食べます。

	アライグマ 食肉目(ネコ目)
科	アライグマ科
体長	41～60cm
尾長	19～38cm
体高	
体重	4～10kg
分布	カナダ南部～中米にかけて分布。日本では海外からの移入により広い地域に定着しています。
食	食性は雑食で、カエル、魚、貝、果物、昆虫等を食べます。
主な特徴	水辺近くの森林や茂みに棲み、夜、岸辺に出て来てカエルや魚、貝などを食べます。前足を水中に突っ込んで獲物を探る姿が手を洗っているように見えることが名前の由来です。子供のうちは愛らしく人懐こいですが、大人になるとかなり狂暴になります。灰褐色の体毛をもち、眼の周りから頬にかけて黒い斑紋があります。タヌキと間違われることが多いですが、タヌキとの違いとして長いフサフサとした尾に黒い横縞があるのが大きな特徴です。4月から6月ごろが産期で、平均3～4頭の仔を産みます。アメリカでは狂犬病ウイルス汚染個体がいるため、生息数管理が行われています。2005年以降の日本では、アライグマは日本の気候に順応し、農作物に被害を与え、生態系を破壊する恐れがあるために、外来生物法により特定外来生物に指定されました。したがって、日本では学術研究などの例外を

除き、アライグマの飼育・譲渡・輸入は原則禁止されており、販売や野外に放つことは厳禁です。近年、日本ではアライグマの野生化が問題になっています。無責任な飼い主が捨てたり、逃げ出したりしたアライグマが野生化しています。元々日本にはいない動物の為、日本の生態系を崩すとして捕獲されれば殺処分対象です。日本で野生化してしまったアライグマに明るい未来はありません
--

目	レッサーパンダ 食肉目
科	レッサーパンダ科
体長	51～63cm
尾長	28～48cm
体高	
体重	3～6kg
分布	中央アジア(ネパールから中国南西部)
食	食性は雑食で、タケやタケノコを食べますが、小型哺乳類、鳥類の卵、昆虫、動物の死骸、果実、地衣類なども食べます。
主な特徴	標高 1800～4000m の竹の多い林に単独ですみます。木登りが得意で、縄張り習性を持ち、お尻をこすり付けてマーキングをします。出産は木の穴などを利用し、子育てはメス親が行います。出産直後の幼獣は体長 15cm。体重 100g、全身は体毛で被われていますが、眼は開いていません。寿命は 8～10 年です。日本では 1976 年に釧路市動物園が初めて飼育下繁殖に成功しました。開発による生息地の破壊、毛皮目的やペット用の密猟などにより生息数は減少しています。ワシントン条約附属書 I に記載され、取引は厳しく制限されています。絶滅危惧(VU) (危急種)です

	アルマジロ 貧齒目(被甲目ともいわれます)
科	アルマジロ科
体長	40～49cm
尾長	11～24cm
体重	3～8kg
分布	中米南部(ブラジル、パラグアイ等)
食	食性は雑食で、シロアリ、昆虫、果物などの植物を食べます。
主な特徴	木のまばらな草原や農地近くの草原にすみ、地中に穴を掘ってねぐらにします。主に夜に活動します。ムツオビアルマジロの名前の由来は背中のおビが6本あることから付けられました。(実際には6～8本)アルマジロ科の動物は外敵から身を守るため、体のほとんどがヨロイに覆われています。このヨロイはタイルのような角質の板がたくさん集まって出来ています。これは皮膚が変化したもので、カメの甲羅と同じものです。お腹にヨロイは無いのですが、体をちぢめ丸くなる事で身を守っています。しかし、ムツオビアルマジロは丸くなることは出来ません。外敵に襲われた時には手足を体の下側に入れて、地面にしっかりと腹 ばいになって体を守ります。それに対し、ムツオビアルマジロは完全なボール状に丸くなる事が出来ます。寿命は飼育下で 15 年 6 ヶ月の記録があります。ペットとしては、比較的大人しく、丈夫で飼育しやすいです。鳴かないので騒音を気にする必要もありません。

目	ネコ目
科	イヌ科
体長	62～78cm
尾長	38～44cm
体重	4～10kg
分布	アジア東北部(日本では北海道)
食	食性は雑食で、ネズミやエゾキウサギ、鳥類、昆虫などを主に食べ、秋には果実や木の実も食べます。
主徴	<p>北半球に広く分布するアカギツネの亜種で、日本では北海道、樺太および周辺島嶼に生息します。北海道では平地から高山帯まで、広く生息しています。キタキツネは中型犬ほどの大きさで、アゴの下から腹部と尻尾の先が白色をしている以外は明るい茶褐色で、足首と耳の裏が黒いのが特徴です。遠目に見ると犬によく似ていますが、尻尾が大きく、鼻先が長いことで区別することができます。本州・四国・九州に生息するホンドギツネよりも全体的にやや大きく、大陸系のアカギツネと相似点が多いです。観光地では、屋間に路上を歩いて観光客にエサをねだったり、ごみ捨て場の残飯や牧場で出産時に捨てられた牛の胎盤をエサとする個体もいます。土手などに穴を掘り、巣穴としています。春先に子供を産み、秋にかけてメスが育てます。オスは単独で行動し、子育てはしません。近年、青森県でも度々目撃されるようになり、青函トンネル内の監視カメラなどに映っていることから、55km以上もあるトンネルを通過してやって来ていると考えられています。青森県で見られるようになったのも、青函トンネルが完成してからです。同様にエキノコックスも青森県で確認されています。野生動物であるキタキツネは、本来ならば人間から食べ物を与えられない状態で頭数のバランスがとれており、人間が干渉することでキタキツネのみならず、その生息環境に悪影響が出ると考えられています。人の食べ物に含まれる、自然界には存在しない甘味や添加物などは、キツネの免疫力を低下させ、本来は発病しにくい寄生虫のダニによる皮膚病を引き起こすことがあり、発病すると毛が抜けて、寒さと体力低下で死に至るキツネが増えています。他方でキタキツネの体表面や糞などを媒介とするエキノコックス症への感染も問題視されており、北海道では餌付けを含めキタキツネに干渉しないよう、生息域で感染の恐れがある行為をしないよう呼び掛けています。これらでは旅行で持ちこまれたペットなどへ、逆にペットからキタキツネへのその他の病気の伝染も危惧されています。キタキツネは北海道のイメージキャラクターです。</p>

	ホンドタヌキ 食肉目
科	イヌ科
体長	46～80cm
尾長	12.5～34cm
体重	3.6～5.3kg
分布	中国、朝鮮、北海道、本州、四国、九州
食べ物	カエル、ネズミ、昆虫等
主な特徴	<p>オス・メスのペアか、数頭の家族グループで、やぶの中、アナグマの古い穴などをすみかとして暮らしています。人家の庭先に現れてゴミをあさることもありま</p> <p>す。北海道にすむエゾタヌキは少し大型です。</p>

	ミニブタ ウシ目(偶蹄目)
--	---------------

科	イノシシ科
体長	50～90cm
体重	20～45kg
分布	原産地：ベトナム
食	食性は雑食
主 特 徴	ベトナムに生息していた小型のブタをヨーロッパで改良した小型のブタはミニブタとして愛玩動物とされています。体重が概ね 100kg 以下で、元々家畜として飼われていたブタの小型のものと、交雑によって作られた種類とがあります。交雑種は主に実験動物用に開発されたものです。アメリカ、イギリス、ドイツ、オーストラリア、日本などでペットとして飼われているミニブタは、ほとんどがベトナムを起源とし、ヨーロッパ→アメリカ→日本に移入された「ポットベリービッグ」（日本語で『太鼓腹のブタ』）であり、ドイツで開発された「ゲッティンゲン」の血を引くものと思われるものもあります。日本のペットのミニブタは 20 年前にアメリカから輸入されました。日本で最初に飼われていたのは徳島県で、『あわわ』という徳島県のタウン情報誌の他、メディアを通じ全国的に広まりました。「ミニブタ」という種類はありません。100kg 以下の種類のことを「ミニブタ」と呼びます。

	いりえわに ワニ目
科	クロコダイル科
体長	全長 3～7m
体重	300～700kg
分布	インド南西部～中国南東部、オーストラリア北部、周辺の島々
食	食性は動物食で、動物全般（動くものなら何でも獲物にします）
主 特 徴	最大のワニであり、最大の爬虫類です。陸地近くの海や河口に住んでいます。泳ぎが得意で海水にも適応できるため、広い分布域をもっています。性質は荒く、人間を含め、あらゆる動物を襲います。爬虫類の中で最も脳が発達していて、イヌやネコと同じくらいの学習能力があると言われていています。産卵のために砂で 2m ほどの巣をつくり、40～60 個の卵を産みます。約 3 ヶ月で孵化し、その期間中温めた卵を 31.6 度に保てばオスが生まれ、それより低いか高い場合はメスが生まれます。開発による生息地の破壊、皮革目的の乱獲などによって生息数は減少しています。シントン条約附属書 I に記載され、取引は厳しく制限されています。

	パーソンカメレオン 有鱗目
科	カメレオン科
体長	45～69.5cm
分布	マダガスカル北部から東部固有亜種
食べ物	食性は動物食で、昆虫、小型爬虫類、小型の鳥類等

主な特徴	最大のカメレオンです。河川の周辺にある降雨林などに生息しています。オスには吻端に1対の突起があり、メスの体色は緑や黄色、淡褐色になります。地域によりカラーバリエーションが見られます。繁殖形態は卵生です。ペットとして日本にも輸入されています。ワシントン条約附属書IIに掲載され、取引が制限されています。
------	--

	にほんとかげ 有鱗目
科	スキンク科 又は トカゲ科
体長	170~250mm (頭胴長)65~96mm
分布	日本(北海道、本州(伊豆半島除く)、四国、九州、大隅諸島)固有種
食	食性は動物食で、昆虫類、クモ、甲殻類、ミミズ等。まれに果実を食べることもあります。
主な特徴	<p>草原や山地にある日当たりの良い斜面等に生息します。冬季になると日当たりの良い斜面の地中や石垣等で冬眠します。種小名 japonicus は「日本の」の意です。日本で本来「トカゲ」とは、このニホントカゲをさしますが、特に東日本ではニホンカナヘビのことを「トカゲ」と呼ぶ人が多いようです。ニホンカナヘビとの違いは、見た目がツルツルした感じがニホントカゲ、カサカサした感じがニホンカナヘビです。幼体は体色が黒や暗褐色で5本の明色の縦縞が入ります。尾は青く、オスの成体は褐色で、体側面に茶褐色の太い縦縞が入ります。繁殖期のオスは側頭部から喉、腹部が赤みを帯びます。メスは幼体の色彩を残したまま成熟することが多いです。天敵はネコ、イタチ、アナグマ、ヘビなどの肉食動物です。繁殖形態は卵生です。繁殖期になるとオスは互いの頭部を差し出しては相手が噛みつくという行為を交互に行い争います。この争いは儀式的なもので、相手の頭部を噛み砕いたりすることは無く、相手の大きさや力を測っていると考えられています。4~5月に交尾をし、5~6月に石や倒木等の下に掘った巣穴に、1回に5~16個の卵を産みます。母親は卵が孵化するまで保護します。オスは生後2年、メスは生後2~3年で性成熟します。</p>

	にほんかなへび 有鱗目
科	カナヘビ科
体長	16~25cm
分布	日本の固有種(北海道、本州、四国、九州およびその属島、屋久島、種子島、トカラ列島の中之島、諏訪之瀬島)
食	食性は動物食で、主として昆虫やクモ、ワラジムシなどの陸生の節足動物を食べます。
主な特徴	<p>海岸近くの平地から1000m以上の山地まで広く生息します。しかし一般的には平地から低山地帯の範囲に多く、森林内よりも草地や林縁部のマント群落などでよく見られ、生垣や植え込み等、緑の多い郊外の宅地や雑草の茂る空き地などでもしばしば繁殖します。尾は全体の2/3を占め、ニホントカゲよりも長い尾を持ちます。ニホントカゲの表面がツルツルした感じに見えるのに対し、カナヘビの表面はザラザラして乾いた感じに見えます。日光浴が大好きです。大人になると、腹面が黄色味をおびます。庭などで普通に見られる、日本ではごく普通の「とかげ」です。関東地方では「トカゲ」というと「カナヘビ」であることが多いです。昼行性の、とても大人しい生き物です。夜は茂みや葉の上で眠ります。危険を感じると、自らの尻尾を切り(自切)、切れた尾が動いている間に逃げます。尾は再生しますが、再生した尾には骨が無く、時に二又になったものが見つかることもあります。東京都と千葉県にて、準絶滅危惧種に指定されています。</p>

	ミシシippiaアカミガメ (別名ミドリガメ幼体) カメ目
科	ヌマガメ科

体長	オス 12~17cm、メス 20~28cm
体重	オス 400~900g、メス 1.5~2kg
分布	アメリカ合衆国の東部から中部
食 べ 物	食性は植物食傾向の強い雑食で、植物の葉、花、果実、水草、藻類、魚類、カエルおよびその幼生、水棲のヘビ、鳥類、昆虫、クモ、甲殻類、貝類、カイメン、ミミズ、動物の死骸などを食べます。幼体は動物食傾向が強いのですが、成長に伴い植物食傾向が強くなります。
主な 特 徴	流れの緩やかな河川、湖、池沼などに生息し、底質が柔らかく水生植物が繁茂し、水深のある流れの緩やかな流水域や止水域を好みます。日光浴が大好きです。冬季は冬眠します。ミドリガメとはもともとコモンスライダーの幼体を指し、その中の亜種にあたるミシシippアカミガメを、ペットショップで「ミドリガメ」として売られているのが一般的です。緑色の体と目の後ろにある赤い斑点が特徴です。幼体の甲羅は鮮やかな緑色ですが、成長とともにくすみがかかった色になります。ミドリガメと呼べるカメ達は、約 10 種類近く存在しますが、亜種を含めると 40 種類以上存在し、その幼体の大半が甲羅が緑色をしているので「ミドリガメ」と呼ばれることが多いです。ペットショップでよく見かけるのは、ほとんどが幼体で、大型になるという一般の認識は低いです。開発による生息地の破壊や、ペット用の乱獲などにより生息数は減少しています。アメリカ合衆国では分布する多くの州、メキシコは国で野生個体の採集は制限、もしくは禁止しています。ペットとして日本にも輸入されていますが、1960 年代後半から飼育個体が捨てられたり、逃げ出したりして全国各地で野生化し、問題になっています。食物や生息場所をめぐる競争により在来種のカメを駆逐したり、捕食により在来生物群集に悪影響を与えています。種として IUCN の侵略的外来生物ワースト 100、日本ではミシシippアカミガメが日本生態学会により侵略的外来種ワースト 100 に指定されています。寿命は 25~40 年です。準絶滅危惧種です。
	<b>シマヘビ</b> <b>有鱗目ヘビ</b> <b>亜目</b>
科	ナミヘビ科
体長	80~200cm
分布	日本(北海道、本州、四国、九州、大隅諸島)固有種
食 べ 物	食性は幅広く、ネズミ、小鳥、トカゲ、カエルのほか、他種のヘビも素早い動きで捕らえます。特に爬虫類や両生類を好み、共食いもします。飼育下ではドジョウを食べた記録もあります。
主 な 特 徴	本種はアオダイショウ、ヤマカガシとともに、日本国内の農村部でよく見られるヘビです。主に耕地や河川敷に住み、草原や森林にも住みます。危険を感じると尾を激しく振るわせ、地面を叩いて威嚇します。通常は淡黄色の体色に、4 本の黒い縦縞模様が入りますが、縞が全くない個体もいます。種小名 <i>quadrivirgata</i> は「4 つの縞」の意です。  虹彩は赤く、瞳孔は縦長の楕円形です。幼蛇は体色が淡黄色。縦縞は無いか不鮮明で、赤褐色の横縞が入ります。伊豆諸島祇苗島産の個体は、海鳥の卵や雛しか食べるものがないために大型化し、2m になる個体もいます。逆に北海道産の個体は小さく、80cm に満たないです。黒化型(メラニスティック)もいて、「カラスヘビ(烏蛇)」と呼ばれます。その個体は虹彩も黒いです。わずかではありますが、アルビノ個体もいます。繁殖形態は卵生で、4~5 月に交尾を行い、7~8 月に 4~15 卵を産みます。繁殖期にはオス同士でからみ付き合い争うコンバットダンスと呼ばれる行動が見られます。メスは出産直後から、しばらくの間は卵を守ります。ペットとして飼育されることもあります。飼育は比較的容易とされますが、同大のヘビと比べると広めのケージが必要であること、昼行性で日光浴を好むこと、ごく稀にカエル類にしか餌付かない個体がいること(殆どの個体はマウスに餌付く)などが注意点とされます。性質には個体差はあるものの、アオダイショウやヤマカガシに比べると神経質で攻撃的な個体が多いです。また、無毒ではありますが、歯は鋭く、咬まれるとかなり痛いです。口内から破傷風菌が検出されたとの報告もあるので、咬まれたら患部を水でよく洗い、消毒して下さい。

	青大将      ヘビ垂目
科	ナミヘビ科
体長	110～200cm （胴の直径:約 5cm）
分布	日本(北海道、本州、四国、九州)固有種
食べ物	食性は肉食で、主に鳥類やその卵、哺乳類を食べます。幼蛇はトカゲやカエルを食べる傾向が強く、成体になるにつれ鳥類や哺乳類を捕食ようになります。噛み付いて捕らえた獲物に身体を巻き付けて、ゆっくり締め付けます。
主な特徴	山地、森林から人家の周辺まですんでいます。木に登るのが上手で、樹上の鳥の巣を襲うこともあります。昼行性で、夜間は岩の隙間や地面に空いた穴の中などで休みます。危険を感じると総排出口と呼ばれる部分から臭いを出します。樹上に上るときには枝や幹に巻きついて登っていくのではなく、腹盤の両端には強い側稜(キール)があり、これを幹や枝に引っかけることでそのまま垂直に登ることができ、樹上を移動します。壁をよじ登ることもできます。人とともに暮らすヘビと言われ、人のいない深山などでこのヘビが観察されることは少ないです。人との関わりが深く、都市部でも緑の多い公園や河川敷などに生息しています。白いものはシロヘビと呼ばれ、天然記念物に指定されています

目	いしがめ      カメ目
科	ヌマガメ科
体長	13～21cm （メスのほうが大型）
分布	日本(本州、四国、九州およびその周辺の島々)固有種
食べ物	食性は雑食で、魚類、カエルやその卵および幼生、昆虫、甲殻類、貝類、ミミズ、動物の死骸、植物の葉、花、果実、藻類などを食べます。
主な特徴	平地の池や沼、湖の浅く流れのゆるい場所に生息している日本固有種のカメです。冬季になると水中の穴や石の下、堆積した落ち葉の中などで冬眠します。幼体時の大きさと体色が、かつての「一銭銅貨」に似ていることから「ゼニガメ」という別称と呼ばれ、ペットとして人気があります。甲羅の後ろ縁がギザギザしているのが特徴です。環境にこだわる性質の為、各地で数が激減しています。準絶滅危惧(NC)です。

	ニホンアマガエル      無尾目
科	アマガエル科
体長	オス:2～4cm    メス:2.5～4.5cm （メスの方がオスより大きい）
分布	日本、バイカル湖～朝鮮半島まで広く分布
食べ物	食性は動物食で、小さな昆虫類やウモ類を捕食します。 動いているものに反応するので、死んだものや動かないものは食べません。 幼生(オタマジャクシ)は雑食で、主に植物片や藻類を食べ、死んだ昆虫等も食べます。
主な特徴	カエルは水辺に住むものと思われがちですが、ニホンアマガエルは樹上で生活に適応していて、水辺の植物の上や森林などに生息します。普通に見られるカエルです。夕立が近づくと大きな声で「クワツ、クワツ」と鳴きます。鼻筋から目、耳にかけて褐色の太い帯が通っています。背面は黄緑色ですが、環境により体色は



特	変わり、茶色、黄色、灰色になることもあります。前足に4本、後足に5本の指があり、すべての指先に丸い吸盤があります。この吸盤で枝から枝へ飛び移ったり、
徴	ガラスの垂直面に張りつくこともできます。春から秋まで活動し、冬は温度差の少ない地中で冬眠します。皮膚粘膜から刺激のある毒を分泌します。触るだけならさほど問題になりませんが、その手で目を擦ると強く痛み、障害が残ることがあります。繁殖期は4月末～8月で、1匹のメスは250～800個の卵を産みます。幼生(オタマジャクシ)は4～7月に変態を完了し、カエル(幼体)になります。20世紀末以降、両生類全体が減少傾向にありますが、本種は立体活動が巧みなこと、ある程度乾燥に強いことから都市部等でも見かけられることもあり、依然普通種であり続けています。

とのさまがえる

目	有尾目
科	アカガエル科
体長	5～9cm(メスの方がオスより大きい)
体重	5～35g
分	本州(関東平野から仙台平野にかけてを除く)、四国、九州と、中国、朝鮮半島、ロシア沿海州。また、北海道の一部(札幌市、江別市など)にも国内外来種として
布	人為分布しています。北海道で初めて定着が確認されたのは1993年と最近のことで、学校教材として持ち込まれた個体が野生化したものと考えられています。
食	食性は動物食で、おもに生きている昆虫類、クモ等を食べますが、食欲で、口に入る大きさであれば小型のカエル、ヘビなども捕食します。
主	平野部から低山にかけての池、水田付近に生息します。春から秋まで活動し、冬は地中で冬眠します。トノサマガエルの名前はよく知られており、非常によく似ているダルマガエルがトノサマガエルと呼ばれていることがあります。動作は陸上・水中を問わず非常に敏捷で、並の人間が道具なしで捕獲するのは困難です。水
な	田などでは外敵から逃れるために素早く水中の泥を掘って身を隠します。また、なわばり意識が強く、同じ容器で飼っている場合などにはしばしば共食いをするこ
特	とがあります。開発による生息地の破壊、水質汚染、水田の減少、人為的に移入されたウシガエルによる捕食などにより生息数は減少しています。また以前まで
徴	は住み分けを行っていたトウキョウダルマガエルと生息地や繁殖時期が重複してしまい、種間雑種による遺伝子汚染も懸念されています。野生での寿命は3～4年です。準絶滅危惧(NT)です。

目	さわがに エビ目(十脚目)
科	サワガニ科
体長	甲幅(甲羅の幅)約3cm
分布	日本固有種。青森県～九州、甌島列島、大隅諸島に分布。
食べ	食性は雑食で、藻類や水生昆虫、陸生昆虫類、カタツムリ、ミズヤ、それらの死骸など何でも食べます。
主	日本に生息する唯一の純淡水産のカニで、山間の溪流などの冷水域に生息しています。平地の田んぼのような水温が高くなる場所は苦手です。また、大きな川に
な	もいません。一度に30～70個ほどの卵しか産みませんが、粒が3mmと大きく、孵化する時には仔ガニの姿になって出て来ます。孵化しても、しばらくは母ガニの
特	腹に付いたままです。生息地によって色彩に変異があり、甲の色が赤褐色や淡青白色の個体も見られます。冬は地面に穴を掘って冬眠します。食べること
徴	もできますが、寄生虫(肺吸虫)がいる場合があるので、生食は危険です。ペットとしても人気があります。